千葉詩藻

千葉県漢詩連盟

平成三十年三月　第五号

目次

『千葉詩藻』第五号発刊に寄せて……1
作品……3
相澤克典　青木智江　秋葉暁子　飯野　廣　市川恵美子　岩澤和枝
薄井　隆　大澤建良　岡安千尋　加藤　武　河野幸男　木村成憲
小久保洋子　齋藤興二　坂本光正　椎名　廣　清水義孝　菅原　満
杉田義久　曽雌幸己枝　高橋秀彰　田沼裕樹　津田峻一　鶴岡志津子
長島ツタヱ　根津静男　原　正　信木充子　宮﨑三郎　宮本美恵子
森崎直武　矢尾　晃　八嶋溪風　山田紗代子　山本　保　芳野禎文
鷲野正明
千葉県漢詩連盟・役員……22
編集後記……22

『千葉詩藻』第五号発刊に寄せて

会長　鷲野正明

『千葉詩藻』は一年の総決算として会員各自が気に入っている作品を掲載しています。連盟設立五周年以後に新たに始めた詩集で、今号で第五号となりました。作詩力も向上し詩道も着実に根づいています。ご高覧賜れば幸いです。

千葉県漢詩連盟（略して千漢連）には、作品発表の場が、

・五年ごとに発刊の『房総風雅』（第三集まで発刊）

・一年ごとの『千葉詩藻』（今号で第五号）

・半年ごとの『会報』「千葉詩壇」（第二十五号まで発行）

・随時　ホームページ

と各種そろい、研修会、吟行会、漢詩創作講座が定期的に行われています。

平成二十九年の吟行会は、

・五月二十五日　谷津バラ園・谷津干潟

・十一月五日　稲毛で新たに制定した「稲毛八景」

の二回行われ、会報とホームページでその成果を発表しました。

今後は、海外吟行四回目となる蘇州吟行を予定しています。国内では他県へも足を伸ばそうと計画を立てています。

多くの会員の皆さんの参加をお待ちしています。非会員の方も大歓迎です。

賀千葉詩藻第五號發刊

谷津馥郁發薔薇
八景新名詩趣肥
景勝欲尋心愈動
乘雲房総夢高飛

千葉詩藻第五号の発刊を賀す

谷津馥郁として薔薇発き
八景新たに名づけて詩趣肥えたり
景勝尋ねんと欲して心愈動き
雲に乗りて房総高く飛ぶを夢む

無月閑吟

天昏漸漸夕陽沈
疎雨潜來雲自浸
暑熱不知何處去
聽蟲思月倚窗吟

暮愁

欲看斜陽到岸頭
冥冥日没浪還幽
白鷗漸去數聲響
一髪天邊紅尚浮

無有　相澤克典

無月閑吟

天昏く漸々として　夕陽沈む
疎雨潜かに来りて　雲自づから浸す
暑熱知らず　何処にか去る
虫を聴き月を思ひ　窓に倚りて吟ず

青木智江

暮愁

斜陽を看んと欲して岸頭に到る
冥冥日没して波還た幽かなり
白鷗漸く去って数声響けば
一髪天辺　紅尚ほ浮ぶ

阿母

今天百壽臥床身
握手涙流歡更新
靜語舊遊聲細細
厚情謝我笑顔頻

午日懷郷

摩天鯉幟正飄颺
孫子凝眸自欲翔
莫忘青雲童幼志
蹉跎顧舊遠懷郷

暁風　秋葉曉子

阿母

今天百壽床に臥するの身
手を握れば涙流れて歓び更に新たなり
静かに旧遊を語るも声細々
厚情我に謝して笑顔頻なり

飯野　廣

午日郷を懐ふ

天を摩す鯉幟　正に飄颺
孫子眸を凝らして　自ら翔んと欲す
忘るる莫かれ　青雲童幼の　志
蹉跎　旧を顧みて遠く郷を懐ふ

訪芭蕉庵想翁欲行奥州

沾花香雨採茶庵
蛙跳古池風雅堪
俯瞰大江翁靜立
先行千住小舟探

南窓讀書

風入南窗弄素帷
繙書凭几復吟詩
昌齡太白心魂爽
正是餘閑清福時

渓燕　市川恵美子

芭蕉庵を訪ね翁の奥州に行かんと欲するを想ふ

花を沾す香雨　採茶庵
蛙古池に跳びて風雅堪ふ
大江を俯瞰して翁静かに立つ
先づ千住に行かんとして小舟を探る

淑眞　岩澤和枝

南窓読書

風は南窓に入って　素帷を弄す
書を繙き几に凭り復た詩を吟ず
昌齡太白心魂爽やかなり
正に是れ　余閑　清福の時

夏日偶成

嬌陽連日地將烘
雨氣未催歎碧空
一片白雲如乃起
應須奔走喚雷公

午日懐郷

與朋歡飲小庭前
鯉幟翻翻夕霽天
自操郷音懐故里
不知歸省是何年

蹊山　薄井　隆

夏日偶成

嬌陽連日　地　将に烘けんとす
雨気未だ催さず　碧空を歎く
一片の白雲　如し乃ち起こらば
応に須く奔走し　雷公を喚ぶべし

大澤建良

午日郷を懐ふ

朋と歓飲す　小庭の前
鯉幟翻々　夕霽の天
自づから郷音を操りて故里を懐ふ
知らず　帰省　是れ何れの年ぞ

枕上聞鳥

初夏蒼山一草庵
輕寒清曉拂煙嵐
微聞牀上新禽囀
夢境園庭猶宴酣

聞子規

緑樹白巖青淺流
伴童江畔泛花遊
飛廻啼鳥如人語
頻促歸家夕照幽

岡安千尋

枕上鳥を聞く

初夏の蒼山一草庵
軽寒の清暁煙嵐を払ふ
微かに聞く牀上新禽の囀るを
夢境の園庭猶ほ宴酣なり

加藤　武

子規を聞く

緑樹 白巖 青浅の流れ
童を伴ない江畔 花を泛かべて遊ぶ
飛び廻る啼鳥 人の語るが如し
頻りに家に帰るを促し 夕照幽なり

望佐渡懐蕉翁

佐渡青峰驚浪先
回頭縹渺彦山巓
一吟正發蕉翁句
今夜定看銀漢天

＊彦山…弥彦山

河野幸男

佐渡を望みて蕉翁を懐ふ

佐渡の青峰　驚浪の先
頭を回らせば縹渺たり　彦山の巓
一吟正に発す　蕉翁の句
今夜　定めて看ん　銀漢の天

山寺落葉

碧天歴歴白雲舒
山寺金風揺落初
持帚一翁留數葉
却成幽美九秋餘

春虚　木村成憲

山寺落葉

碧天歴々として　白雲舒ぶ
山寺金風　揺落の初め
帚を持つ一翁　数葉を留め
却って幽美を成す　九秋の余

訪韓国論山故宅

鷄林金屋老松奇
四百餘年今古姿
琴瑟相和迎遠客
喫茶語舊共怡怡

避暑偶作

焦土炎威夏日長
亂蟬磴道入山房
夜深獨起凭欄立
滿耳溪聲滿面涼

凰洋　小久保洋子

韓国論山故宅を訪ぬ

鷄林の金屋 老松奇なり
四百余年 今古の姿
琴瑟相ひ和して遠客を迎へ
茶を喫し旧を語り 共に怡々たり

齊藤興二

避暑偶作

土を焦す炎威 夏日長し
乱蟬の磴道 山房に入る
夜深けて独り起ち欄に凭りて立てば
満耳の渓声 満面の涼

小園聞鳥

園中徐歩拂春眠
樹下微吟朝日前
歌鳥忽聞聲甚滑
自慙拙詠只茫然

春日雑詠

風軟寒消花映軒
濛濛膏雨緑陰繁
綿蠻出谷農時促
野老耕忙數畝園

坂本光正

小園鳥を聞く

園中徐に歩して春眠を払ひ
樹下微吟す　朝日の前
歌鳥忽ち聞く　声甚だ滑らかなるを
自ら拙詠を慙じて只茫然

耕道　椎名　廣

春日雑詠

風は軟かに寒は消え花は軒に映ず
濛々たる膏雨　緑陰繁し
綿蠻谷を出でて　農時を促し
野老　耕は忙し　数畝の園

蜻蛉

何物池邊如矢來
忽停忽下忽還回
数千複眼碧天映
振網童兒眉目開

寄千葉縣漢詩連盟

文風忽起道方全
詩境新開房総天
烏兎匆匆追憶裏
乃祈騒客愈連綿

蕗山　清水義孝

蜻蛉

何物ぞ池辺 矢の如く来る
忽ち停まり忽ち下り忽ち還た回る
数千の複眼 碧天映じ
網を振ふ童児 眉目開く

有恒　菅原　満

千葉県漢詩連盟に寄す

文風忽ち起りて道方に全し
詩境 新たに開く房総の天
烏兎匆々追憶の裏
乃ち祈る騒客 愈いよ連綿たらんことを

山中探秋

空山幾曲一溪通
決決清流剪剪風
忽見錦楓秋興極
夕陽獨歩萬紅中

北窓松籟

雨後閑庭暑氣收
松濤謖謖緑陰樓
北窓陣陣涼風起
臥聽琴音興趣幽

山中秋を探る

杉田義久

空山幾曲　一溪通ず
決々たる清流　剪々の風
忽ち見る錦楓　秋興極まるを
夕陽　独り歩む　万紅の中

北窓松籟

如蘭　曽雌幸己枝

雨後の閑庭　暑気収まり
松濤謖々　緑陰の楼
北窓陣々として　涼風起こり
臥して聴く琴音　興趣幽なり

送書生赴考試

莫言淺學悔無涯
不識誰能通百家
已見曉天雲五色
曲江應賞萬枝花

高橋秀彰

書生の考試に赴くを送る

言ふ莫れ　浅学　悔ゆること涯り無しと
識らず　誰か能く　百家に通ずるかを
已に見る　暁天　雲五色なるを
曲江　応に賞すべし　万枝の花

春日醉吟

閒庭濾酒悅春暄
坐忘世塵車馬喧
醉裏欲遊何處是
鷄鳴犬吠遠人村

観水　田沼裕樹

春日酔吟

間庭　酒を漉して　春暄を悦び
坐忘す　世塵　車馬の喧
酔裏　遊ばんと欲するは何れの処か是なる
鶏鳴き　犬吠ゆ　遠人の村

詣稲毛淺間神社

淺間境内繞松林
賽客佳辰遠到尋
美貌祭神皇統母
古來安産仰欽深

峻嶺　津田峻一

稲毛浅間神社に詣る

浅間の境内　松林繞る
賽客　佳辰に遠く到り尋ぬ
美貌の祭神は　皇統の母
古来　安産　仰欽深し

殘月

曉起仰看茅屋前
中天隱兎月成弦
四周靜寂無人影
曙色東方雲彩連

香苑　鶴岡志津子

残月

暁起仰ぎ看る　茅屋の前
中天兎を隠して　月弦を成す
四周静寂　人影無く
曙色の東方　雲彩連なる

潮來馬拉松

晩秋早曉走沿川
息白御風追貨船
靄靄水郷陽上處
汗珠暉映畫橋邊

汀渚夏夕

長汀散策熱如烘
驟雨忽來雷鼓中
一陣爽風雲影去
茫茫海上夕陽紅

曉舟　長島ツタヱ

潮来マラソン
晩秋早暁　走りて川に沿ふ
息白く風を御して　貨船を追ふ
靄々たる水郷　陽上る処
汗珠暉映す　画橋の辺

根津静男

汀渚夏夕
長汀散策すれば　熱きこと烘くが如し
驟雨忽ち来たる　雷鼓の中
一陣の爽風　雲影去り
茫々たる海上　夕陽紅なり

外孫十七歳誕日

呱呱秋暑旦
聞報喜洋洋
德國身心養
扶桑情緒康
東西倶得學
歐亞共爲鄕
彼此山河迴
萬邦千里翔

正軒　原　正

外孫十七歳誕日

呱々　秋暑の旦
報を聞きて　喜び洋々たり
徳国に身心を養ひ
扶桑にて情緒康なり
東西　倶に学び得て
欧亜　共に郷と為る
彼此　山河迴かなり
万邦　千里に翔けよ

午日懐郷

昔日家家鯉幟翻
玉弓甲冑自嚴然
今唯獨坐空居裏
遙憶幼兒驅賀筵

歳旦偶成　貴州省

迎得熙春苗族郷
樓前竝立靚裝娘
笑顔羞客延年盞
嫋嫋暄風白酒芳

白翠　信木充子

午日郷を懐ふ

昔日　家々　鯉幟翻へり
玉弓　甲冑　自づから厳然たり
今は唯だ　独り空居の裏に坐し
遥かに憶ふ　幼児　賀筵に駆けるを

尚堂　宮崎三郎

歳旦偶成　貴州省

迎へ得たり熙春　苗族の郷
楼前並び立つ　靚装の娘
笑顔客に羞む　延年の盞
嫋々たる暄風　白酒芳し

午日懐郷

鶴髪五兄佳節筵
共斟蒲酒願延年
遠懐故里伴吾走
鯉幟仰看還戯天

小園聞鳥

新樹益濃池畔鮮
陰陰苔徑緑相連
野禽宛囀鳴呼友
處處應酬如雅筵

翠竹　宮本美恵子

午日郷を懐ふ

鶴髪の五兄　佳節の筵
共に蒲酒を斟み　延年を願ふ
遠く懐ふ　故里　吾を伴ひて走り
鯉幟　仰ぎ看れば還た天に戯るるを

荘石　森崎直武

小園鳥を聞く

新樹益ます濃やかにして池畔鮮やかなり
陰々たる苔径　緑相ひ連なる
野禽宛囀　鳴きて友を呼び
処々応酬　雅筵の如し

鏃風　矢尾　晃

手賀沼聞蛙吹

午枕南薫暑氣輕
竹香吹入一心清
夢醒日暮忽疑雨
閣閣滿池蛙奏鳴

手賀沼に蛙吹をきく

午枕　南薫　暑気軽し
竹香吹き入りて一心清し
夢醒め日暮れ忽ち雨かと疑ふ
閣々満池　蛙奏鳴す

過小野泉水有感

美人小町遠流寓
或伴父君行里居
脩竹雀鳴風愈冷
潭湫愁殺月來初

小野の泉水に過ぎりて感有り

美人小町　遠く流寓す
或いは父君に伴ひ里居に行く
脩竹　雀鳴き　風愈いよ冷ややかなり
潭湫　愁殺す　月来たるの初め

*碑曰茲小野小町生誕之地、泉水在熊本市植木町小野。

八嶋溪風

浴別所温泉

積綿柳絮古松枝
小鳥飛來温水池
滾滾聲中伸脚浴
微風點雪夕陽時

午日懐郷

畝裏蛙鳴蚯蚓蠕
耕田引水老農夫
懐郷時正普賢祭
閑浴菖香歸思驅

巴渓　山田紗代子

別所温泉に浴す

綿を積む柳絮　古松の枝
小鳥飛来す　温水の池
滾々声中　脚を伸ばして浴すれば
微風　雪を点ず　夕陽の時

午日郷を懐ふ　山本　保

畝裏　蛙鳴き蚯蚓蠕く
田を耕し水を引く　老農夫
郷を懐へば時正に普賢の祭
閑かに菖香に浴して帰思駆る

柏葉校園驛前大山茶

移植山茶經六年
樹齡三百正悠然
玉英萬木幽香放
雅趣盈盈春色天

芳野禎文

柏の葉校園駅前大山茶

山茶を移植して六年を経たり
樹齡三百　正に悠然
玉英万木　幽香放ち
雅趣盈々　春色の天

稲毛暮雪

下雪何時嘗擁街
南房北総暖初佳
冱寒尚想銀花積
滑走乗橇去海涯

翔堂　鷲野正明

稲毛暮雪

下雪何れの時か嘗て街を擁す
南房北総　暖きこと初めより佳なり
冱寒　尚ほ想ふ　銀花積まば
滑走　橇に乗って海涯に去かん

永らくお世話になりましたことお礼申し上げます。

先日、中高生の「私の折々のことばコンテスト」という記事に目がとまる。佳作に選ばれた中学生の次の言葉が印象に残った。

「全力で恥をかけ」

人前で恥はかきたくない。しかし恥をかいた経験は強く心に残り忘れない。つまり身に付くということは誰しも皆体験しているであろう。恥じをバネにして奮起するすることもあろう。漢詩作りにも「全力で恥をかけ」は自らを高めるために必要な言葉かもしれない。中学生の言や良し。

（清水記）

千葉県漢詩連盟　役員

最高顧問　石川岳堂
常任顧問　菅原有恒
顧　問　宇野直人　川久保貞軒　河内君平
　　藤田梨那
会　長　鶯野翔堂
副会長　八嶋溪風
理事・事務局長　清水蕗山
理　事　相澤無有　青木智江　秋葉暁風　薄井蹊山
　　椎名耕道　津田峻嶺　長島ツタエ
　　根津静男　宮崎尚堂　森崎荘石
監　事　矢尾鏃風

編集後記

お陰さまで『千葉詩藻』も第五号の発刊になりました。ご協力に感謝いたします。三十七作品の掲載となりました。

来年は、五十作品の掲載を目指し事前啓蒙をはかりますので宜しくご協力ください。

昨年まで印刷をお願いしておりました（株）アクトローズ社から、社をクローズすることとなった旨連絡をいただいたのは十二月の末のことでした。

平成三十年三月二十日
編集発行　千葉県漢詩連盟
事務局　〒二七四－〇八一六
千葉県船橋市芝山七－三四－二十
清水蕗山
TEL・FAX　〇四七－四六八－〇四一六

印刷　キクノウ印刷所